

讃岐香川の様々な文化発展を応援します。

文化通心

B U N K A T S U S H I N

2019 秋 No.103

Photo by Keisuke OTA



NAGARE STUDIO「流政之美術館」開館

高松に素晴らしい美術館が生まれました。ナガレストジオは、庵治半島東の岬に建つ故流政之氏の住居兼、制作の拠点です。1966年から広大な敷地に焼きそこないの煉瓦を集め、少しずつ改装と増築を繰り返し現在の姿となっています。晩年までこの場所で暮らし、数え切れない作品を制作していました。

● 第5回 あ・うんの数寄講座

茶の湯をさらに楽しむ夏期講習

9月から11月までの茶華道情報／財団からのお知らせ

発行：公益財団法人 中條文化振興財団

〒760-0017 高松市番町2丁目1番12号

TEL (087) 826-3355 FAX (087) 826-2212

2019年秋号 No.103 9月1日発行(季刊)

茶の湯をさらに楽しむ夏期講習

茶の湯の奥はとても深い。最近はいろんな雑誌でもよく取り上げられるようになったが、内容は大きな特集でもごく一部しか書ききれていない。歴史的に見ても、ざっと800年。茶祖千利休が生まれて500年。現代に続くその担い手である数寄者の変遷は、茶の湯の知恵を大きく広げた。多面的な価値観が混在し、共存できる不思議な世界である。今年も5人の素晴らしい論客をお招きして楽しいお話を聞かせていただいた。

第1回 7月28日(日)

「茶花あれこれ」

講師 武内範男(日本文化史研究家)

恒例「あ・うん数寄講座」第一日目。

講師の先生は、長年、畠山記念館の主任学芸員を務められた日本文化史研究家の武内範男先生。現在は茶道愛好者を対象に茶花教室を開講されていると伺いました。畠山記念館は東京白金台で、荏原製作所創始者の畠山一清が愛でた日本や東洋の国宝六件を含む茶道具と能関連の古美術品などを館蔵展示している美術館です。

先生の著書や出版の編者になられた多くの書物の中には「やさしい茶花の入れ方」「茶趣の花ごよみ」など、また、現在開催しておられる茶花教室、あるいは、本日の演題「茶花あれこれ」などから、当然、茶花を連想しておりましたが、専門の茶花だけにとどまらず、先生のとても広範囲多岐にわたる博学識のご披露に、うなづいたり気づかされたりの連続でした。

暑さ一段という日、会場になった財団茶室広間の床間の壁には、夏向きに白一色に表装された清楚な掛軸(本紙は「氷室」の和歌短冊)が掛かり、畳床には広口の透かし籠に蒔葎や白桔梗、秋海棠、控えめの色合いの中に濃紫や朱を際立た



武内範男(日本文化史研究家)

昭和22年生まれ。大谷大学大学院仏教文化専攻修士課程修了
思文閣出版、思文閣美術館を経て、畠山記念館主任学芸員を務める
著書『やさしい茶花の入れ方』『茶趣の花ごよみ』『女流茶人 堀越宗円』
編著『西川一草亭 一風流一生涯』
現在、茶道愛好者を対象に茶花教室を開講する

せた鉄線花や雁皮センノウが生けられていました。先生はお軸の説明をしながら「季節ごとのしつらいに、春は懷紙、夏短冊、秋は文(消息)、冬一条(墨蹟)と申します」とおっしゃりながらやんわり立ち上がって、「また、花も今日は大勢さんをお迎えするという事で賑やかに入れてありますが、小間ならこれとこれぐらいに」と蒔葎と鉄線花の二種を抜き取って、併せ持った指をかざして見せました。組み合わせを変えたと花の表情が一変して「あつ」となり、そう言えど、過去の濃茶席で見た凜とした床間の花が思い出され、ぼんやり見てきたものを「なるほど」と再確認させるといった具合です。

先生の話は、さりげなく具体的に茶席

のしつらいの論理性を説いていきます。季節、炉や風炉の違い、茶会の趣向、茶室や部屋広さ、茶道具との合わせなどを、それぞれが独立してあるものではなく、あるべき姿の中の構成要素と認識した「趣向に合わせた花であるべき」との基本論に併せて、完成度に気を使わずに味を失ってはいけなやか、時代の風潮に迎合して伝統の格(品位)を崩してはならないし、格の喪失、崩れたら取り戻せない、主軸がぶれるといけないと強調して、世相に鋭い切込みも交ります。しかし、昔と変わってきた住宅事情に伴う変化、例えば、突き上げ窓のなかった頃の茶室、今のように電灯のなかった時代の座敷では、薄暗かった部屋に白い



スケッチした茶花日記を見せていただく

花が幽玄に愛でられたが、それが今の明るさの中で同じ情景を生むかというところには語れないと、柔軟性も示しながら進んでいきます。伝統を厳守しながらの創造、時勢に沿った革新が前進を生むなどと、先生のこれまでの修練、たゆまぬ勉強の基本ありての説得力でしようか、水面下の確かな含蓄のあるお話がパノラマ式に展開しながら聞く者をぐいぐいと引っ張っていきます。

のの見極めの大切さを強調されたのは、「守破離」の精神の大切さを説かれたのだと感じました。

最後に、洋風化される時代の中で茶花のありようが問われるが、根底の思いは変わらないと簡潔に結ばれた時、やはり、長い間、畠山記念館という時代に淘汰されてなお生き続ける美の集積の中で身につけた美への確かな目線、恵まれた環境の中で磨かれた先生本来の美に対する感性が真摯な言葉で菌切れよく、楽しいジョークを織り交ぜた巧みな話術に終始した、和やかであつという間の一時間半でした。

(妹尾共子)

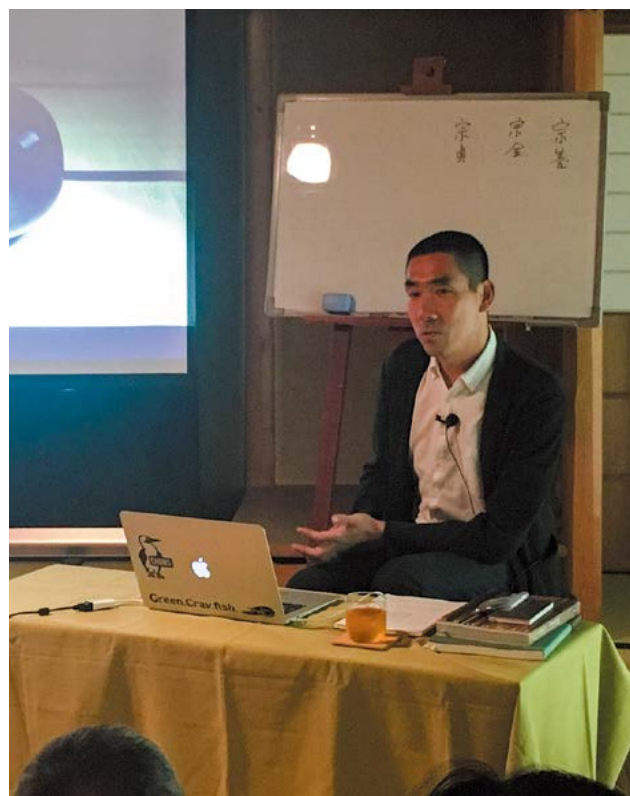
第2回 8月3日(土)

「善五郎家の仕事」

講師 永樂陽一 (17代永樂善五郎後嗣)

土風炉から陶磁器への変遷について、善五郎家の歴代のお話しを始められました。

まず、風炉についての説明。鉄・唐金・土などで作られたものがあり、元々は中国から仏具として輸入されたものが、その後、茶道に特化していき、利休さんの後の時代には、よく使われるようになった。では、どうやって作られているのか？ 黒光りしているので、漆を塗って



永樂陽一 (17代永樂善五郎後嗣)

1972年 京都生まれ
1997年 東京芸術大学日本画専攻卒業
2002年 東京芸術大学大学院後期博士課程日本画専攻満期修了
2002年 父永樂善五郎の元 家業手伝い
京焼歴代展一継承と展開、永樂歴代と十七代永樂善五郎展に出品

いると思われたが不明のため次の四通りの実験を試みた。

- ① 土を磨いて焼いて、煤をつける。
- ② 土を磨いて焼いて、燻して漆を塗る。
- ③ 土を磨いて焼いて、漆を塗る。
- ④ 土を磨いて焼いて、漆以外の黒い塗料を塗る。

しかし、これだと断定できる方法は、

不明のままである。初代からの作られた土風炉を調べると、真つ黒ではなく少し茶色がかつていて光沢が柔らかいものがあり、これは燻し具合の違いによるものと考えられる。また、磨きあとも思われる「すじ」が見られるものもある。型としては、大丸釜風炉、だるま釜風炉など

があり、後ろにも窓を作り空気が流れるようにしたものもあるが、これは三代から九代の間に作られたものと思われるが、はっきりとはしない。いずれにしても、利休型の設計図をもとにして作っていたと思われる。釜風炉と言われるが、釜のために風炉を作るのが本筋なので、新しい釜ができたならそれに合わせて風炉を作っていたと思われる。

九代の時、天明の大火で印などすべて焼失してしまった。十代了全からは、紀州公から「永樂」の名をいただき永樂姓を名乗ることになる。この頃から家元好みの物を作り始め、風炉と陶器いわゆる金欄手・染付など作っていたと思われる。十二代和全は、請われて四〇五年九谷へ赴き、華やかなものを作り始めた。

その窯あとは、いまも金沢の旅館の庭に残っている。十四代得全は、海外の博覧会に出品しており、独特の図柄のものを作ったが、早世のため作品は少ない。十六代(陽一氏の祖父)の時代には、色絵の焼き物が中心で土風炉はほとんど作られていない。

ここまで歴代のお話しを一区切りし、陽一氏ご本人のお話しを始められた。

仁清のうさぎの香炉にヒントを得て作られた猿の香炉、娘さんの初節句の記念に作られた手の中に納まるくらいの小さな少女像の香炉などを写真で紹介してくださった。また、本来の土風炉作りの方法に挑戦して、杓立てや花入れ、香炉なども作ってみた。黒光を出すための磨ぎと漆塗りのどちらの作業が楽かは言えないとのこと。千家十職の一つの家であつ



六代宗貞 達磨堂釜風炉



十一代保全 金欄手宝珠香合

たので、家元から「こういうものを作つて欲しい」と言われれば、この一品だけしか作らないというのではなく、いつでも対応できるように自分でできることはしているとも話された。現在も釉薬の研究をされており、呉須のサンプルを自分で作つて、色を確かめて作品にしているとのこと。土の種類や焼成温度の違いで、同じサンプルでも発色が変わってくるのはならないと話される。

温度変化に弱く、底部は二十センチほどもあり、重さ二三十キロにもなる土風炉。お茶席のために一週間も灰つくりをかけ、一人で準備をするとおっしゃる。一期一会のおもてなしのために労される一面を知ることができた講演でした。

(千葉規美子)

第3回 8月4日(日)

「曾祖父『聿斎宗泉』について」

講師 木津露真(武者小路千家流 ト深庵)

木津露真宗匠は、今年度の二月に随縁斎若宗匠と共に財団で釜を掛けていただきました。

木津家は、代々武者小路千家の職分家として約二百年に渡つて、寄り添うように活躍された家です。「ト深庵」とも称されています。

木津家の初代・松斎宗詮は、松平不昧公の知遇を得て、不昧公自筆の「寒松一式十年別有」の軸を拝領し、その勧めで武者小路千家八代一啜斎宗守に入門され、さらに宗詮・ト深庵・寒松軒の号を授けられました。

二代・得浅斎宗詮は、松斎の養子となり、紀州藩に仕官して大阪在住のまま御仕入方として従事。幕末には陸奥宗光との親交もありました。武者小路千家十一代一指斎の幼少期に後見を務められました。後に跡見学園を創設する跡見花蹊や平瀬露香は、この頃に社中になっていきます。

さて、今回のお話の中心は得浅斎の子、三代聿斎宗泉の仕事について年表を使いながら振り返るといってお話でした。露真宗匠にとっては曾祖父になります

が、先ごろ聿斎宗泉の残された膨大な資料を、大阪市の歴史研究の一助にと寄贈され、その仕事の一端は平成二十四年に大阪歴史博物館で「大阪の茶の湯と近代工芸」という展示会でも紹介されました。聿斎宗泉は、文久二年(一八六三)得浅斎の一七番目の子供として産まれました。幼名は十七吉(となきち)。後に榊造、宗一と改めました。

明治六年。十二歳になると、単身上京し、旧紀州藩邸に起居し、漢学者の上田章、安井息軒に漢字を学びました。翌年、近衛篤磨の書生となり実業家になろうと思っていたところ、篤磨から「蛙の子は蛙になれ」ということがあるから、ぜひ前代の跡を継ぎ、茶人になれ」と言われ、茶人になる決意をしたそうです。そして篤磨の勧めで、宮内庁内匠寮の木子清敬棟梁に伝統建築について学びました。

明治十二年、平瀬露香と共に再び上京し、大蔵省簿記伝習所に入學。その二年後、二十歳で第三十二銀行に入行されましたが、明治十七年に大阪市東区役所に再就職したそうです。

さて、茶の湯の方は、十九歳で一指斎宗匠に入門し、明治十四年北野天満宮献茶奉仕に参加します。今日は献茶式も普通のことになりましたが、当時は神仏に対する献茶式そのものが初めての事で、前年の兄の表千家碌々斎の後に続くものでした。

明治の初めは宗教界にとっては神仏分離、茶の湯に於いても、廃藩置県や急速

な西欧化のありで存続の危機も含めて大変な時代となりました。この頃はようやく落ち着いて来たタイミングでもあったようです。

献茶式により、家元のお点前が観覧できるように、茶の湯も少人数から大寄せの茶会が生まれるなど、茶の湯の大衆化の始まりとも言える行事となりました。先に始まっていた跡見花蹊らの女子教育の中で、茶の湯が採用されたのも大きかったかもしれません。

明治三十一年、聿齋三七歳の年末に一指齋宗匠が亡くなり、当時十歳であった武者小路千家十二代愈好齋が表千家久田家に引き取られ、平瀬露香が家元を預かりました。露香が四十一年に没すると、家督を相続した平瀬露秀が継いで、翌年の明治四十二年、平瀬家などが後見に入り、当時四十二歳の聿齋宗匠に家元預か

りが任されることになりました。この時は大好きなお酒を三年間断酒されて臨まれたそうです。大徳寺より「聿齋」号をいただいたのもこの時です。

北浜の平瀬家の控宅を官休庵家元稽古場とし、自らも大川町に居を構え、就職していた豊田絨店に勤めながら、お点前の指導はもとより茶室などの設計や建築のために全国に回り、遠くは韓国まで赴きました。手がけられた茶室や庭園は百件以上有ります。

大正三年には、海南市の新田長次郎の別荘温山荘の茶室と潮入式池泉回遊庭園を設計。高松玉藻城の堀と同様に海水を引いた庭園です。

同四年には、大徳寺聚光院・茶室の改修。この時聿齋は、改修資金を捻出するために朝鮮の陶窯で渋草灰器を九十九個作らせました。

同七年に小川治兵衛が作庭した旧住友本邸慶沢園と茶室「長生庵」。同十一年には松花堂遺愛の遠州好みになる「閑雲軒」を泰勝寺に再建し、益田鈍翁が披露の釜を掛けています。

中でも昭和四年、貞明皇后（大正天皇皇后）の大宮御所の茶室「秋泉亭」のご下命を受け、その功により一代限り「宗泉」の名を賜りました。

また、執筆にも精力的に取り組む、大正元年には『官休清規』、翌年には『利休百首管見』を発行しています。大正十二年には『調味料理菜』を著し、茶料理に対する考え方や調理法、素材の扱い方まで説いています。

大正七年、聿齋五十七歳の時に、十二代愈好齋が宗守を襲名され武者小路千家家元を継承され、家元預かりを返上されました。愈好齋三十歳の時で、この時の襲名披露茶事は、平瀬家の独楽庵において四十七回に渡り催されました。

大正八年には、京都武者小路にも復帰、家元稽古場で稽古を開始されました。同年、松平家より「木守茶碗」が拝借され、五十五回に渡る官休庵復旧の茶事が行われました。そして茶室「官休庵」は昭和三年に竣工し現在に至っております。

大正十一年、聿齋は、一連の茶会の後見を終えて、愈好齋に返伝し、一段落しました。

昭和八年、桂離宮に感銘を受け、世界に紹介したドイツ人建築家ブルーノ・タ



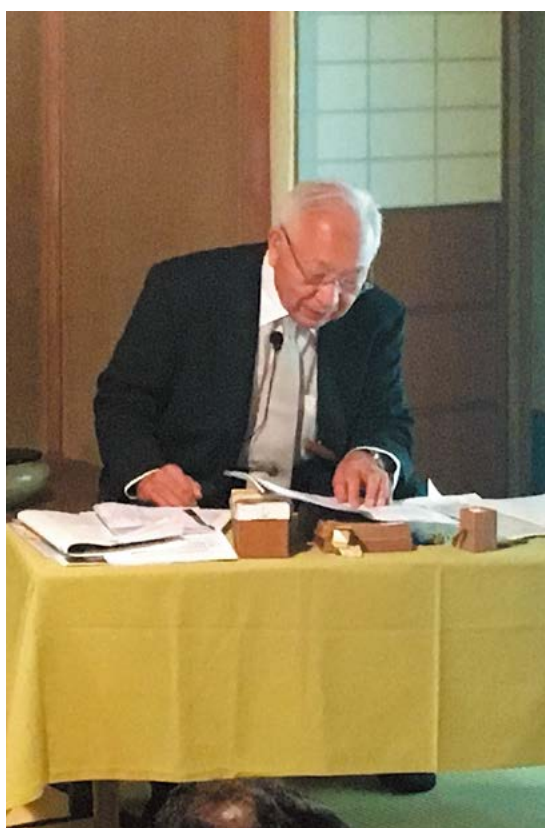
清技会の職人が合作した、茶籠。二分割する茶杓に愈好齋の花押

ウトの来訪を受け、親交を持ちました。その間も多くの数奇屋建築に携わりながら、好みの卓子（立礼卓）を工夫したり、茶道具についても探求されました。

道具とはあくまで使う者に親切でなければならぬ。比較的安価で、かつ粗末でも清らかであるべきというのが聿齋の考え方でした。この念願を達成するために「武者の小路社」が中心となって清技会が組織されました。会員は大阪を中心に京都や金沢などの職人たちで、昭和十三年には三越大阪支店と高松支店で、清技会工芸品展覧会が開催されました。

昭和十四年、病床に就き、見舞いに訪れた近衛文麿の実弟水谷川忠麿にお茶を差し上げたのが、最後のお茶会となったそうです。

（中條晴之）



木津露真（武者小路千家流ト深庵）

昭和18年生まれ

平成10年 5代木津宗詮死去後

平成12年 6代宗詮継承 家元より徳至齋号をいただく

平成26年 桜齋に7代を継承し隠居 2代露真を名乗る

秋の夜長に物思う

「柿くえば鐘が鳴るなり法隆寺」

明治時代を代表する俳人、文学者である正岡子規の有名な一句です。最後の奈良旅行、法隆寺の茶店で柿を食べていると、法隆寺の鐘の音が響いてきた。静寂とした空気に響くその音を聞いていると、なんとも穏やかな秋の長閑さを感じるものだという意味合いだそうです。

奇しくも柿は奈良時代に中国から伝わってきたものなのか、奈良の法隆寺でこの句を詠んだ子規はこのことを知っていたのでしょうか？

柿は、秋の果物の代表として人気ですよね。生柿は身体を冷やしますが、干し柿にすると胃腸を丈夫にし内蔵を温めてくれるそうです。

柿の独特な甘さは、スイーツにしても存在感を示してくれます。特に、時間をかけて乾燥させた干し柿を使ったスイーツは、なんとも言えない上品な甘さで、お茶菓子としてもおすすめです。

そんな干し柿に白餡を詰めた吉岡源平餅本舗の“まんで柿”干し柿のちょっと固い食感と白餡の柔らかな食感が絶妙に絡み合い季節感を味わえる逸品です。

子規の句にちなんで10月26日は「柿の日」だそうです。ここ香川では鐘の音はあまり聞こえてきませんが、秋の夜長に虫の音を聞きながら一粒いかがですか。



お茶の風景(5)

西徳寺の門瓦



夏の風物詩、西徳寺の七夕茶会は三木町池戸七夕まつり協賛として、半世紀を越して続けられています。

田園風景の中でひとときわ目立つ、なだらかなお寺の大屋根を目指して車で行き、駐車場から暑さを避けながら影道沿いに…。門前で一礼して境内の大銀杏をくぐった広い本堂で、夏向きに涼やかな趣向でおもてなしのお薄一服を感謝でいただいた後、三々五々の帰り道。ふと振り返ると、お寺の山門屋根の魔除けの鬼瓦が定番のものと違って、牙を剥いた猪らしいことに気づきました。

築二百二十年という山門は長い歴史の中で、何度かの改修、屋根瓦の葺き替えを繰り返している間に、いつの頃かの棟梁の洒落っ気でしょうか。でも、古代に猪のような強い獣が好まれた鬼門の彫刻瓦が変化して現在形になったとの説もあります。亥年の今年なればこそ、由緒あるお寺をしつかり守っている猪たちが健気に思える一場面でした。



財団行事予定(9月~11月)

9月

- ◆ 懐石講座 三友居 山本勝先生
9月3日(火) 午前11時・午後3時
- ◆ 書道教室
毎月第1・第3金曜日 森本義人先生
9月6日・20日(金) 午前10時~12時
- ◆ 和菓子講座
毎月第2金曜日 高橋初乃先生
9月13日(金) 午前10時~12時
- ◆ ヤングヤング(子供茶の湯教室)
毎月第2・第4土曜日 山下純子先生
9月14日・28日(土) 午後1時~
- ◆ 月に一度の喫茶室 毎月第3火曜日
9月17日(火) 午前10時~午後3時迄
自由なお時間にお出掛け下さい。
ランチは要予約です。

10月

- ◆ 財団賞授賞式・
助成金交付団体認定書授与式
10月1日(火) 午前10時30分~
- ◆ 書道教室 森本義人先生
10月4日・18日(金) 午前10時~12時

◆ 10月月釜 五人様茶会

- 日時 10月6日(日)
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)
濃茶 武者小路千家 大内守雄
薄茶 武者小路千家 竹井守恵
茶席 濃茶・薄茶・点心席
会費 5,000円
入席時間ご案内
(各席2時間15分を予定)
第1席 A席・B席 9時
第2席 A席・B席 10時30分
第3席 A席・B席 11時15分
第4席 A席・B席 12時45分
第5席 A席・B席 14時15分

◆ 晴友会研修旅行

10月8日(火)~9日(水)
詳細は最終ページに記載

◆ 和菓子講座 高橋初乃先生

10月11日(金) 午前10時~12時

◆ ヤングヤング 山下純子先生

10月12日・26日(土) 午後1時~

◆ 月に一度の喫茶室

10月15日(火) 午前10時~午後3時迄

自由なお時間にお出掛け下さい。
ランチは要予約です。

11月

- ◆ 書道教室 森本義人先生
11月1日・15日(金) 午前10時~12時
- ◆ 11月懸釜「開炉の茶会」
日時 11月3日(日)
処 美藻庵 晴松亭(当財団茶室)
濃茶 裏千家 筒井宗紘
薄茶 裏千家 筒井宗曜
ご好評につき満席となりました
- ◆ 懐石講座 三友居 山本勝先生
11月5日(火) 午前11時・午後3時
- ◆ 和菓子講座 高橋初乃先生
11月8日(金) 午前10時~12時
- ◆ ヤングヤング 山下純子先生
11月9日・23日(土) 午後1時~
- ◆ 月に一度の喫茶室
11月19日(火) 午前10時~午後3時迄
自由なお時間にお出掛け下さい。
ランチは要予約です。

茶華道ガイド

Sakado Guide

安部流洗心会四国支部 TEL (0877) 86-3442

11/10 栗林公園月釜 席主：安部流四国支部
掬月亭 前売700円・当日800円 9:00～15:00

江戸千家不白会香川支部 TEL (087) 851-5330

9/15 大西・アオイ花茶会 席主：江戸千家不白会香川支部
大西・アオイ記念館 前売700円・当日800円 9:00～15:00

表千家同門会香川県支部 TEL (087) 845-4638

9/8 東讃地区四季茶会 席主：横井宗永
大西・アオイ記念館 700円 9:00～15:00
9/29 支部創立記念茶会 席主：平田宗経・大山宗美
玉藻公園披雲閣 1,400円 9:00～15:00
10/12、13 香川大学医学部茶会 席主：表千家香川大学医学部
医学部図書館西側 300円 10:00～15:00
10/13 栗林公園月釜 席主：表千家同門会香川県支部
掬月亭 700円 9:00～15:00

香川大学表千家流茶道部 TEL 090-5917-1085

9/15、10/20、11/17 月釜 龍光塾 500円 10:00～14:00

琴平月釜茶道会 TEL (0877) 58-9551

10/10 金刀比羅宮例大祭奉祝奉賛茶会
席主：煎茶静風流 金丸洋子
アクト琴平 200円 10:00～15:00
10/20 松尾寺月釜 席主：武者小路官休庵 山下教子
松尾寺 500円 9:00～15:00
11/3 琴平町文化祭 席主：裏千家淡交会香川支部琴平教授者
(田中宗武・片桐宗恵・上杉宗邦・宮武宗隆)
アクト琴平 200円 10:00～15:00

茶華道一茶流久松会 TEL (087) 885-2322

10/27 一茶流久松会茶と花会 席主：角陸一彩
中條文化振興財団 1,300円 9:00～14:30

茶道裏千家淡交会香川支部 TEL 090-4337-1280

9/22 丸亀分会 月釜 席主：香川宗美
生涯学習センター 500円 10:00～15:00
9/22 坂出分会 月釜 席主：谷本宗喜
勤労福祉センター 500円 10:00～14:00
10/13 善琴分会 茶筌供養 席主：善通寺教授者
総本山善通寺 500円 10:00～15:00
10/11 多度津分会 観月茶会 席主：多度津分会
町民会館2Fホワイエ 300円 17:30～20:00
10/20 坂出分会 月釜 席主：坂出分会B班
光明寺(坂出市旭町) 500円 10:00～14:00
10/27 坂出分会 文化の茶会 席主：松野宗幸
万葉会館 600円 9:30～15:00
10/27 観音寺分会 一夜庵茶会 席主：観音寺教授者
興昌寺 500円 10:00～15:00
11/2、3 善琴分会 綾歌ふるさと祭 席主：綾歌教授者
アイレックス 300円 10:00～15:00
11/3 丸亀分会 文化の茶会 席主：西本宗秀
生涯学習センター 600円 10:00～15:00
11/4 多度津分会 芸術展茶会 席主：多度津分会
総合福祉センター2F 600円 9:00～15:00
11/3 善琴分会 琴平町文化祭 席主：琴平教授者

アクト琴平 200円 10:00～15:00
11/24 善琴分会 護国神社新嘗祭 献茶
席主：善通寺教授者(献茶：山下宗澄) 善通寺護国神社
12/8 坂出分会 月釜 席主：常盤宗春
勤労福祉センター 500円 10:00～14:00
12/8 多度津分会 月釜 席主：柏 宗昌
総合福祉センター2F 500円 10:00～15:00

茶道裏千家淡交会高松支部 TEL (087) 841-0605

9/8 栗林公園月釜 席主：高橋宗久 栗林公園掬月亭
前売700円・当日800円(入場料別) 9:00～15:00
〈淡交会高松支部 月釜〉
大西・アオイ記念館 前売600円・当日700円 9:30～15:00
9/1 席主：後藤宗幸
10/6 席主：長尾宗里
11/3 席主：坂東宗代
12/8 席主：高松青年部

茶道石州流琴松会 TEL (087) 888-5311

10/13 創立第63回記念茶会 席主：茶道石州流琴松会
大西・アオイ記念館 700円 9:00～15:00

石州流讃岐清水派石州会 TEL 090-2826-9229

10/20 流祖宗関公347年祭記念茶会 席主：金丸宗洋(1席)、
池内宗明・大上宗喜・金澤宗保・米谷宗代(2席)
玉藻公園披雲閣 1,200円 9:00～15:00
10/27 第109回 長尾静風会大茶会 席主：野口宗眞
長尾寺 1,200円 9:00～15:00
11/3 高松屋島ライオンズクラブ 秋の茶会 席主：植田宗弘
玉藻公園披雲閣 1,000円 9:00～15:00

武者小路千家香川官休会 TEL (087) 851-2258

〈香川官休会月釜〉 無量寿院 700円 9:00～15:00
9/1 席主：在松会
11/3 席主：三好社中

武者小路千家官休庵青年部 TEL 090-5274-2720

11/16 特別講演会「茶の湯 いま・むかし」
講師：千 宗屋(武者小路千家 家元後嗣)
香川県文化会館 1,000円 13:30～

高松市香南歴史民俗郷土館 TEL (087) 879-0717

〈由佐城月釜茶会〉 第2研修室(和室) 500円 9:30～14:30
9/15 席主：木村千鶴栄(煎茶道三癸亭貢茶流 松岡愛子社中)
10/20 席主：豊島宗喜(裏千家 川原宗津社中)
11/17 席主：小川宗陽(茶道石州流宗家高松会)

鬼無庭園美術館 TEL 090-2782-2063

10/13 開館2周年記念茶会「月見とのだてと」
(点心と野点席) 席主：中條晴之(武者小路千家)
4,500円 ①17:00～、②17:45～、③18:30～

まちのシュレ963 TEL (087) 800-7888

10/5、19 ギャラリー企画展「かがわの、アトリエから。」
茶席：5日(I期)・19日(II期) 各日 1,500円
①12:00～、②13:30～、③15:00～、④16:30～、⑤18:00～

中條文化振興財団 TEL (087) 826-3355

10/6 10月月釜 五人様茶会 5,000円
濃茶：武者小路千家 大内守雄、薄茶：武者小路千家 竹井守恵
11/3 11月懸釜「開炉の茶会」 20,000円
濃茶：裏千家 筒井宗紘、薄茶：裏千家 筒井宗曜

詳細は、財団行事予定をご覧ください。



令和元年度

第27回財団賞決定のお知らせ

今年度の財団賞は、各教育委員会よりご推薦いただいた4件のうち、審議の結果、次の2団体に決定いたしました。両団体ともに後継者育成に力を注がれておられます。

● 大川念仏踊保存会

(まんのう町教育委員会教育長推薦)

大川念仏踊の起源は、平安時代に遡るとされ、大川山山頂の大川神社において奉納されている雨乞念仏踊です。

念仏踊の中心をなす中踊は、大きな団扇をもった下知役、太鼓役、鉦役の3人で構成され、小学生の男子が行うことに特徴があります。

● 松原太鼓保存会

(東かがわ市教育委員会教育長推薦)

松原太鼓は、江戸時代末期、潮まちをしていた家島(姫路市)の漁師から大漁祝いの太鼓を教わったことが始まりと伝えられます。年間の定期公演回数も多く、毎週の定例練習を含めると盛んに活動をされています。

● 財団賞審議委員会より

平成5年10月の財団の設立時より始まった財団賞は、郷土香川県の文化発展のために、長年に渡り人知れずご尽力された方々を発掘して、顕彰させていただくという理念で設けられました。これも「文化は人」という設立者の思いを具体化したものです。地域の祭りの保存会などで熱心に牽引されて、次代に継承する努力をされている人も貴重な存在です。また市町村合併などで、推薦される機会を失った方の存在もあるのではと危惧するところですが、もしお心当たりの方をご存知でしたら、財団にお知らせください。詳細を調査させていただきます。今年度の財団賞の授与式は、10月1日です。

秋の晴友会研修旅行のご案内

日程 令和元年10月8日(火)～10月9日(水)

参加費 30,000円(非会員は35,000円)／定員は30名様

友の会の皆様には、日頃より大変お世話になりましてありがとうございます。

さて、今年度最初の研修旅行は、少し趣向を変えて海の京都、丹後まで足を伸ばしてみようという一泊二日の企画です。

初日は、天橋立を經由して、伊根湾をぐるりと囲む舟屋群の美しい伊根浦公園や酒蔵を訪ね、さらに伊根湾を船で巡ります。泊まりは、奥伊根温泉 油屋。江戸時代は蝋燭を作っていたので、屋号が油屋。当初は民宿から始まり、昭和38年に映画「五番町夕霧楼」のロケで来られた佐久間良子さんとのご縁で開業。平成26年にリニューアルされた料理旅館です。日本海の美味しい魚料理をご賞味いただきます。

二日目は、この地を祖とする紫野和久傳が、平成29年にオープンした和久傳の森です。美術館 森の中の家 安野光雅館は、安藤忠雄氏の設計。長年に渡り社員の皆様が植樹してできた森を散策して、工房レストランで昼食をいただきます。

なかなか行きにくい場所ですので、ぜひ、この機会に皆様と一緒できたら嬉しいです。

表紙の言葉

世界的彫刻家 流政之は1923年生まれ。刀鍛冶、装丁家、零戦パイロットなどの経歴をもち、彫刻だけにとどまらず作庭や陶芸、家具デザインなど、多彩な造形においても独自の技法やスタイルを確立した作家でした。ナガレスタジオは流政之の哲学、美学を背景に築いた制作活動を語る上で欠かすことのできない場、流の感覚が集結した場所といえるでしょう。限りなく流の暮らしていたまの空気を残し公開しております。(NAGARE STUDIO／流政之美術館)

【美術館の見学とサポートについて】

見学をご希望の方は、ホームページから見学ツアーの申し込みができます。また、個人、法人を対象にしたお得なメンバーシッププログラムも是非、ご活用ください。 ●お問合せ 087-871-3011

編集後記

遅い入梅、一時の取水制限、そして連日の猛暑、今年の夏もいつものパターン。外も暑いが財団の夏期講習も熱心な方々がご参加くださり、盛り上がりつつあります。

お茶に関するいろいろなお話や道具のことなどお聞きして、納得したり感心したり時間の時間を過ごし、また、帰宅してからお伺いしたことを思い出し自分なりに調べるといふ学びの楽しみもあります。

様々な分野でご活躍の講師の方のお話しをひと夏に聞くことができる催しで、ほんとうに有意義な講演会だと思います。毎年ご参加していただいている方はもちろんですが、まだご存知ない方をお誘いして次回も是非ご参加ください。暑さに負けずにお過ごしください。

【声・情報お寄せください】

〒760-0017

高松市番町二丁目一十二

公益財団法人 中條文化振興財団編集部

TEL(087)826-3355

FAX(087)826-2212

info@chujo-zaidan.or.jp